

(仮称) 医科大学院大学準備委員会 (第2回) 会議録

日 時	【公 開】 令和4年5月24日 (火) 午後4時00分から午後5時00分まで 【非公開】 令和4年5月24日 (火) 午後5時00分から午後5時20分まで
場 所	ホテルアソシア静岡 (4階 カトレア)
出席者 職・氏名	出席委員: 9名 (敬称略) 田中一成、伊藤裕、岩井一宏、浦野哲盟、木苗直秀、小林利彦、 宮地良樹、渡邊裕司、渡邊昌子 ※小林利彦委員、渡邊昌子委員は web による参加 事務局 出野副知事、山口県参与、八木健康福祉部長、後藤健康福祉部長代理、 紅野健康福祉部理事、田中健康福祉部参事、奈良健康福祉部参事、 大石健康福祉部政策管理局長、高須医療局長、赤堀健康局長 ほか
議 題	1 (仮称) 医科大学院大学準備委員会の進め方 2 (仮称) 医科大学院大学が目指す方向性
配付資料	議事次第 委員名簿 資料1 第1回準備委員会 主な意見 資料2 (仮称) 医科大学院大学基本構想 項目 (案) 資料3 (仮称) 医科大学院大学準備委員会の進め方 (案) 資料4 (仮称) 医科大学院大学が目指す方向性 資料5 (参考) 各医科大学院の理念・目標等 参考資料1 第1回委員会議事録 参考資料2 静岡県の地域医療 関連図表 (別冊) 参考資料3 (仮称) 医科大学院大学に期待する効果 参考資料4 当委員会の目的及び審議の進め方 参考資料5 大学院 (医学分野) の設置基準等 参考資料6 (仮称) 医科大学院大学準備委員会設置要綱

1 審議内容

八木健康福祉部長から資料1～5により「第1回準備委員会 主な意見」、「(仮称) 医科大学院大学基本構想 項目 (案)」、「(仮称) 医科大学院大学準備委員会の進め方 (案)」及び「(仮称) 医科大学院大学が目指す方向性」について説明した後、各委員による議論を行った。

(1) 主な意見

ア 学問・研究

- ・今後重要度が増す婦人科、小児科、内科における新生児の発達支援や、ストレスなどの精神神経科領域を持つ大きなグループになれば、研究上のメリットも生じる。
- ・研究フィールドは、再生医学などの大類的なものに様々な科の先生が入りやすくする手法が考えられる。基礎、臨床という考え方は不要である。
- ・臓器を越えた再生医療や免疫医療など、特徴的なアプローチが必要である。
- ・異なる学問領域の人が研究に加わることで、新しい発想ができる。グローバルな観点も加えていい。

イ 人材育成

- ・強力な附属病院が魅力となって教官や学生が集まり、そこで研修しながら臨床研究できるという方向を目指すべき。
- ・学生が附属病院の職員になれば、今までと異なる新しいタイプの大学院大学になる。
- ・基本方針の中に、“臨床しながらできる””卒業後も継続できる”など、読むだけで、「静岡県に特徴的な大学院」だと思わせる文言があれば、理念として現実的になる。

ウ 地域医療への貢献

- ・学位取得後も大学との関係を継続するには静岡への定着が必要。持続可能性という言葉を前面に出すべき。
- ・医科大学院大学の教員や学生を県内に派遣するシステムをつくる。
- ・静岡県に自治体病院が多いのは、強みでもある。県立、公立を横断する医師の交流、学問・研究の交流、データの共有などを取り入れるべき。

エ 附属病院

- ・医学部のない医科大学院大学においては、県を挙げて強力な附属病院群をつくる必要がある。
- ・こころの医療センターとこども病院が附属病院に加わり、今後重要度が増す婦人科、小児科、内科における新生児の発達支援や、ストレスなどの精神神経科領域を持つ大きなグループになれば、研究上のメリットも生じる。〈再掲〉

オ 専門医資格取得

- ・静岡県立病院機構が運営する病院が医科大学院大学の基盤になり、学生がその職員になれば早く専門医資格が取れる。
- ・附属病院に多様な専門医プログラムがあれば、専門医も学位も早い段階で取れ、他と差別化できて魅力になる。

カ 入学定員

- ・入学定員は開学時の医療状況などで変わるので、基本構想での確定は困難
- ・入学定員によって教員の数や建物の規模が決まるので、ある程度の具体的な数値は必要である。

キ 教員確保

- ・教官、学生の立場も含め、既存の大学院とは完全に変えるべき。診療科や臨床・基礎などに捉われない研究領域の設定もできる。
- ・高いレベルの研究は、教員や学生にとっての魅力という観点からも必須である。
- ・例えば臓器を越えて再生医療や、免疫医療などに特化するなど、教官にとっても魅力的なアプローチを基本方針に書くべき。〈再掲〉
- ・教官を集めることは非常に難しいので、実績よりも活動が活発かを重視し、若い人に5～10年いてもらうつもりで取り組むべき。

ク 研究環境

- ・教官数や研究設備の制約で当学で対応できない研究は、連携を活用すればよい。
- ・学生数が小規模であっても、十分な研究サポート体制があり、高いレベルの研究ができれば教員にとって魅力になる。

(2) 第3回準備委員会の審議方針

今回までに委員から出た意見を参考に、事務局が基本理念、基本方針のたたき台を作成し、次回の委員会にて審議いただくことについて、了承を得た。